



1997年7月ウラジオストクで

私が会長をつとめたのは1998年1月から2001年12月までの2期4年間である。すでに10年近く前のことで、この間のことに関する記憶はだいぶ薄れてきているが、思い出すままに、また就任前後の時期の鳥学ニュースを読み返しながらかいてみたい。

私の前の会長は山岸哲さん、その前は森岡弘之さんであった。森岡会長るときには、学会改革に関するアンケート調査が実施され、その結果に沿って会則が改正されるとともに学会運営体制の改革が行われた。その次の山岸会長がその改革を定着させ、学会をさらに発展させる基礎をつくり上げた。

会長就任の挨拶（鳥学ニュース No. 66）で、私が強調したのは、学会の顔として重要な位置を占める学会誌の定期的な発行とその内容の充実であった。この課題は私が会長になる以前から続いており、そう簡単には解決しない問題であったし、現在も投稿論文がそれほど多くなく、その傾向は多少残っているとおもう。山岸会長るとき、私は副会長をおおせつかっていたこともあり、任期中のその他の課題は、おもに前会長から引き継いだもので、後述の鳥類目録改訂6版の発刊のほか、私の任期中に新しいことはとくになかったとおもう。

山岸会長るときから会長のもとに事務局を置き、パートの事務局員を採用して事務局を運営することになった。首都圏や関西地方などと違って、私の勤めていた帯広畜産大学のある帯広のような地方の小都市では、能力のあるパート職員を探すのは非常に困難であった。最初の事務局員には他によい働き口があるからとすぐに退職され、後任がなかなか見つからなかった。やむなく当時研究生として私共の研究室に在籍していた早矢仕有子さんに事務処理をお願いし、なんとか切り抜けることができた。ただ、会誌発送は一人では無理で、研究室の学生諸君に手伝っていただいた。

会長の他に、それ以前から私は鳥類目録改訂6

会長4年間を振り返って

12代会長 藤巻裕蔵 FUJIMAKI Yuzo

版の目録編集委員会（1985年6月発足）の責任者もおおせつかっていた。まずは都府県の会員に分布情報の収集をお願いし、資料をそろえるところまではやや予定していた時期をオーバーしたものの順調に進んだ。次にこれらの資料をもとに500余の全種について種毎の都道府県分布一覧を作成したが、これを一人でやったのでかなり時間をとられた。それからこの分布資料を分類群ごとの執筆者に送り、原稿執筆をお願いした。早々に原稿を送って下さった方もいたが、いくら催促しても書いていただけない人もいて、これが遅れの大きな原因となった。当初1990年の国際鳥類学会（ニュージーランド）までに出版し、この学会会場で販売しようという計画であったが、作業の遅れや分担執筆者の交代などがあり、出版は遅れに遅れ、2000年になってしまった。新たな種の採用については学術誌への発表など一定の基準を設けたが、これが不評をかったと聞いている。しかし、学会が責任をもつ目録である以上標本・文献といった根拠が必要不可欠である。資料を整える間さまごまの記録の収集に苦勞したこと、上述のように論文として発表されていない記録を整理する必要性を強く感じたこともあり、目録刊行後に鳥類記録委員会を立ち上げた。この委員会の成果は現在進行中の改訂7版の編集に大いに役立っていることとおもう。発売開始は2000年秋の札幌大会のときで、受付に積んであった目録が今でも目にかぶ。私の任期中に目録を発刊できたのも、絶えず私の尻をたたいてくれた森岡さんのおかげである。

「会長は、学者としての業績も勿論だが、管理者としての実務能力にもすぐれていなければならない」（鳥学ニュース No. 48）のだが、会計をはじめとして学会事務の全体を把握できるまでにはかなりの時間を要した。会長任期を終えてだいぶ時間が経過したが、管理者としてはたして私は合格点をもらえたのだろうかという思いが今でも残っている。